

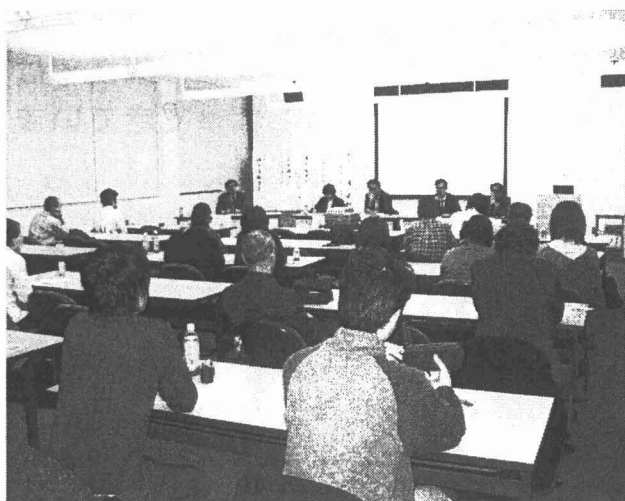
☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

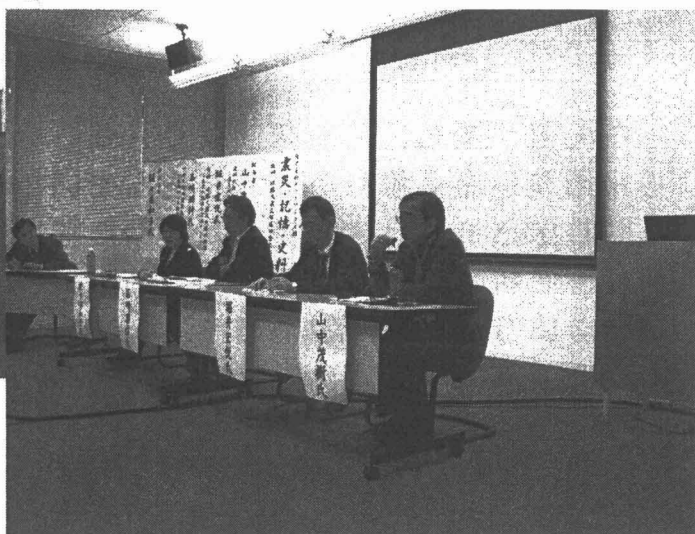
第56号 2009年1月30日(金)

発行：歴史資料ネットワーク

シンポジウム「震災・記憶・史料」開催される!!!



▲ 討論のようす (2008年12月7日)



▲ 右より山中茂樹氏、堀井宏悦氏、石崎勝伸氏、
佐々木和子氏、司会 大国正美氏

■ □ ■ 目 次 ■ □ ■

巻頭言

震災という“経験”と現在

川内 淳史…2

山形文化遺産防災ネットワークの活動紹介

手代木 美穂…8

◆◇特集◇◆

シンポジウム「震災・記憶・史料」

板垣 貴志…3

書評『地域社会からみた「源平合戦」』

参加記

松田 聡子…4

山田 路…11

参加記

…5

震災という“経験”と現在

—阪神・淡路大震災から 14 年目をむかえて—

川内 淳史

阪神・淡路大震災の発生から早 14 年の月日が流れました。震災の発生を契機に歴史資料の救出を目的に結成された歴史資料ネットワークも、現在では「震災を知らない」若い世代が積極的に活動に参加するようになってきています。

かく言う僕も、そんな「震災を知らない」世代の 1 人です。震災発生当時、被災地から遠く離れた地域に住んでいた僕の目に飛び込んできたのは、テレビに映し出された、大地震で大きな被害を受けた街の光景でした。それから連日の様に新聞やテレビでは、その街の様子報道がなされました。遅々として進まないライフラインの復旧、全国から続々と駆けつけるボランティア、そして「復興」へ。それらは全てメディアを通して知りました。大学生になって 2002 年、初めて旅行で神戸を訪れたとき、そこにはもはや震災の面影のない、「復興」した街がそこには広がっていました。震災はもはや過去の事なのであろう……そんなことを思っていました。

昨年 12 月 7 日、史料ネットでは若手委員を中心に「震災・記憶・史料—阪神・淡路大震災の歴史的検証」と題するシンポジウムを企画・実施いたしました。詳しい様子は本誌をご覧くださいと思いますが、今回のシンポジウムで明らかになったことは、関西と関東とでは震災発生当初より震災報道のあり方には相当の差異が見られたということです。多くの非被災地に住む人々にとって、震災についての情報はメディアを通して入手するということを考えると、その意味は小さくありません。近年起こっている日本社会の急激な変化について、その変化の起点を 1995 年に置く議論が最近提起されています（たとえば中西新太郎編『1995 年—未了の問題圏』（大月書店、2008 年）など）。

そこでは震災という経験も、我々の日本社会全体に大きな影響を及ぼしたものであることが指摘されています。しかし、この震災という“経験”のとらえ方が社会において一様ではなかったということは、現在、日本社会全体の問題として認識されている阪神・淡路大震災という“経験”は、実はその質ということに関しては、社会の中で相当の差異をともなつて“経験”されていたということです。こうしたことを考えると、震災から14年がたった今、阪神・淡路大震災という“経験”とはいったい何だったのであるか、現在、改めて歴史的に問われる必要がある様に思われます。

また今回のシンポジウムでコメントをお願いした佐々木和子さんは、現在も収集が続けられている「震災資料」に関して、震災を契機に歴史学者の資史料に対する視点が、過去の資史料をいかに“発掘”するかということから、未来からの視点に立って、現在残っている資史料をいかに“残す”かというところにシフトしたことを述べられました。すなわち震災という“経験”を契機に、歴史家にとって最も基本となる資史料に対する視点も、改めて問い直される必要を迫られているということです。

2006年11月に行われた歴史科学協議会大会において、宮地正人氏が「歴史家の職責」ということに触れて「歴史家とは過去への入り口を託された存在である」ということを述べられていましたが、こうしたことからすると、震災資料の存在を捉えたとき、歴史家とは過去のみならず、未来の社会のあり方までも託されている存在であるということが言えるのではないのでしょうか。その責任は決して軽くはありません。「震災を知らない」世代である僕ら若手もそのことを肝に銘じて、今後も史料ネットの活動に取り組んでいきたいと思っています。
(かわうち・あつし / 歴史資料ネットワーク運営委員)

第4回 地域史卒論報告会のお知らせ

例年の通り、歴史資料ネットワークと神戸史学会が共同して地域史卒論報告会を開催いたします。多くの市民の方々の参加をお待ちしております。

記

- ・ 日時：2009年3月8日（日） 午後1時半～4時半
- ・ 場所：西宮市大学交流センター 講義室1（定員54名）
- ・ 報告者 檜垣和志さん（大阪大学）「中世興福寺の大衆統制」
山田美佳さん（神戸大学）「明治末期新世界設立過程にみる大阪市政の動向」
森田順子さん（神戸大学）「大正期の地方鉄道敷設過程にみる地方政治状況
—出石鉄道を事例に—」
- ・ 参加申し込み メール（s-net@lit.kobe-u.ac.jp）、ファックス（078-803-5565）、ハガキ（〒657-8501 灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内）にて

歴史資料ネットワーク主催
シンポジウム

震災・記憶・史料

～阪神・淡路大震災報道の歴史的検証～

板垣 貴志

2008年12月7日、歴史資料ネットワーク主催シンポジウム「震災・記憶・史料～阪神・淡路大震災報道の歴史的検証～」が人と防災未来センターにて開催されました。

このシンポジウムでは、歴史研究者が多用している「新聞」の史料的意義や限界を、阪神・淡路大震災報道を対象に考える趣旨で行われました。人と防災未来センターの所蔵する震災資料群のなかには、切り抜きされた新聞が膨大に含まれています。これは被災市民自らが新聞を史料化していったと表現することもできます。私は、前々からこの現象が非常に気になっていました。つまり寄贈された膨大な新聞スクラップ資料は、被災地全域で、「大震災は後世に伝えるべき歴史的事件」という共通認識があったことを雄弁に物語っており、また歴史学が大震災を研究対象とする際に、まず「新聞報道」に着目する意義があると考えました。

報告者は、元朝日新聞編集委員で関西学院大学教授の山中茂樹氏「史料化阻む3つの陥穽－震災報道からみた1つの論点－」、読売新聞東京本社編集委員の堀井宏悦氏「阪神・淡路大震災報道の検証－東京の記者の記憶から－」、神戸新聞社会部の石崎勝伸氏「14年間の震災報道－現場からの報告－」でした。山中氏からは、温度差報道、客観報道主義、デジャブ報道の3つのキーワードを用いて総括的な報告がありました。その上で、東京での震災報道の実態を堀井氏より、被災地神戸の地元紙として、長年震災報道を続けてこられた石崎氏より報告がなされました。次に、歴史学の立場から神戸大学地域連携研究員の佐々木和子氏よりコメントがあり、3者の報告を、順に周辺部、外部、内部と整理され、新聞を読み解く際の複眼的な視野の獲得の必要性が説かれました。

最後に、報告者・コメント・司会に参加者を含めた討論の場では、多様な意見が飛び交い、議論が深められたように感じました。しかし、「新聞がどのように作られているのかについて、自分があまりに無知であったことを知らされました（30代女性／アンケートより）。」といった意見に代表されるように、歴史研究者は新聞の作成過程に関する知識に乏しく、討論に至らず勉強会のよ

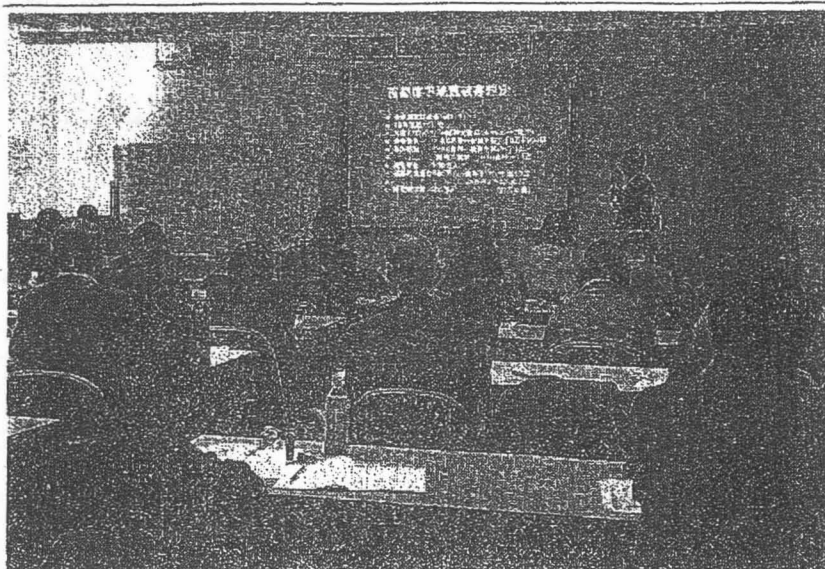
うになってしまった感は拭えませんでした。そのことは一方で、報道記者の方々がこれでよかったのかと内部で散々議論されてきたことは、ほとんど一般に知られていないことを意味しているかと思います。シンポジウムの成果を記録として残しておく意義を再認識した次第です。

今後も、史料を生み出す現場の報道記者と、史料を批判的に読み解く歴史研究者との共同作業を続けていきたいと思います。

(いたがき・たかし／歴史資料ネットワーク副事務局長
／人と防災未来センター震災資料専門員)

!!!新聞に掲載されました!!!

2008年12月18日(月) 産経新聞・朝刊・22面



震災報道を歴史的に検証しようといわれたシンポジウム
＝神戸市中央区

震災報道歴史的に検証

記者と専門家、神戸でシンポ

震災から14年が経過するのを前に、阪神・淡路大震災に関する報道を歴史的に検証するシンポジウムが1日、神戸市中央区の「人と防災未来センター」で開かれ、新聞記者や歴史の専門家が意見を交わした。

震災直後や復興に関する報道の「史料」としての価値を検証しようと、ボランティア団体「歴史資料ネットワーク」(事務局・神戸市灘区)が主催した。史料を残す側の新聞記者と、それを使う側の歴史家の意見交換の場はめずらしいという。

はじめに、被災地取材した記者や元記者3人がそれぞれの体験などを報告。「東京と大阪の報道の間には温度差があった」「行政機能がマヒしたときの、メディアへの期待を感じた」などと述べた。

これを受けて、佐々木和子・神戸大学地域連携研究員が講演。「新聞は基本的な史料だが、記録の過程に人の行為が入るといふ点では批判が必要になる」とし、「史料を作る側、使う側の協同作業が必要な時期になった」と話していた。

震災報道の功罪 シンポで考える

人と防災未来センター

阪神大震災の報道について検証するシンポジウム(歴史資料ネットワーク主催)が7日、神戸市中央区の人と防災未来センターで開かれた。市民ら約40人が参加し、読売新聞東京本社人の堀井宏悦・編集委員ら3人の報道関係者が「震災報道」の問題点や成果など功罪を考えた。

堀井編集委員は「東京と大阪で震災報道に対する認識のズレがあり、東京では発生直後の現場リポート記事がほとんど掲載されなかった」と指摘。元朝日新聞編集委員で、関西学院大の山中茂樹教授は「東海地震や関東大震災への防災を出发点とする東京と、震災からの復興を主眼に置いた関西では、報道の方向性に違いがある」とその背景を説明した。

一方、神戸新聞社会部の石崎勝伸記者は「涙に暮れる被災者の前では、自分自身は何も役に立たないと感じた」と振り返りながらも、「避難生活やストレスによる体調悪化で多くの人が亡くなったことを紙面化したことなど、掘り起こした事実もあった」と述べた。さらに「失われた命が問いかける教訓を生かす必要がある」と報道の意義を強調した。

2008年12月8日(月) 神戸新聞・朝刊・22面

震災報道の歴史的意義は

地道な取材史料に

記者と研究者
シンポジウム

中央区
災害史料としての新聞報道を考えるシンポジウム「震災・記憶・史起で、新たに掘り起こした事実が歴史資料につながる」と強調。奥村弘神戸大教授も「震災はまだ分からないことも多く、今後の研究・発信が大事」と話した。

被災史料の保存活動に取り組む「歴史資料ネットワーク」の主催。神戸新聞社会部の石崎勝伸記者は、震災後の体調悪化で亡くなる「関連死」という概念ができたことや、震災死者数が発生から十年後に修正されたことについて「地道な取材と報道による問題提起で、新たに掘り起こした事実が歴史資料につながる」と強調。奥村弘神戸大教授も「震災はまだ分からないことも多く、今後の研究・発信が大事」と話した。

全国紙の編集委員は、東京では地震の直後から「もし東京で起きたら」といった記事が重視されたことに触れ「被災地との温度差もあったので、は」と振り返った。一方、研究者からは「だれに向けての情報を考える

■「震災・記憶・史料～阪神・淡路大震災報道の歴史的検証～」

についての感想

松田 聡子

阪神・淡路大震災が起こった当時の私は、現場とは遠く離れた場所に住んでいた。そのため報道された震災の様子は、本当にショッキングなものだったが、実際に日本で起きたことだという実感がなかなか沸かなかったことを覚えている。

今回のシンポジウムでお話を聞かせていただき、現場で行われていた報道と、離れた場所で行われていた報道の違いについて初めて知ることができた。温度差があったことや、報道する内容にも違いがあったこと、情報収集の大変さ、個人情報保護と実名報道との関わり等、今まで知ることがなかったことを実際の報道者側から聞くことができ、非常に貴重な機会だったと思う。また、新聞は実際の出来事を残すものではなく、体験した人間の出来事や行為を記録するものである、というコメントが印象的だった。時代の変化と共に、歴史資料として使えるもの、残すべきものが少しずつ変化したり、増えていたりすることを、改めて気付かされた。

(まつだ・さとこ／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究補助員)

■ シンポジウム参加記

神戸新聞社会部の石崎氏の“震災は現在も続いている”という言葉がとても印象的でした。いま阪神・淡路大震災について考えるとき、私たちはこのことを念頭に置きながら、話をしていかなければならないと思いました。

また、今まで身近にある“新聞”を“史料”という意識では見たことがなかったので、今回のシンポジウムを通じて新たな視点で“新聞”というものを知るきっかけを得ることができました。新聞は、その時その瞬間の情報を発信しているものであるため、単発的にみては情報が交錯し誤解を招いてしまう危険性があるということがわかりました。新聞を史料として用いるのであれば、収集を行い連続的にみて情報を読み解いていくといったように、テレビなど他のメディアと同様に記録媒体である新聞も使う側の読み解く力がもっと必要になるのではないかと強く感じました。新聞を作る側は、当初から“史料”として新聞を作っているわけではないため、情報の取りあげ方や視点なども新聞によ

って異なります。このことを史料として新聞を使う側がしっかり捉えて使用するべきであるということ、新聞の場合は史料批判（史料の検証）は他のどんな史料よりもシビアに行ったほうがよいのではないかということを感じました。

震災を振り返るとき、歴史学者や報道関係者などが専門的に検証するだけではなく、被災者も共に検証するということが可能になれば、震災の中での報道の意義やそのなかで作られる新聞の在り方などについても、また違った捉え方ができるのではないかと思います。

（20代女性）

2008.12.07 「震災・記憶・史料～阪神・淡路大震災報道の歴史的検証～」
当日アンケートより

■新聞がどのように作られているのかについて、自分があまりに無知であったことを知らされました。ただ、東京のメディアの中心が、何を意図して、報道が結果としてこうなるのかということがわからないままです。（例えば震災1ヶ月後に「復興」が言われるのか。）しかし、そういう「メタデータ」が新聞史料の背後にあることへの自覚を持たねばという意識を持てたことは大変ありがたく、貴重な収穫でした。ありがとうございました。（30代女性／大阪府池田市）

■いつも身近な存在である新聞、マスメディアにおける「記事になるまで」のお話は大変興味深く聞かせていただきました。これらの相対化は、これらから情報を得る自分の相対化にもつながると感じました。読者が新聞記事にどのような反応をしているのかも知りたかったです。今後は、資料となっていない声を「資料化」する、収集された資料をどのように活かすかというお話をもっと深く聞きたいです。（20代女性／大阪）

■3氏の報告、大変勉強になりました。ありがとうございました。当時東京で働いており、家族を神戸に残していたので心配な日々を思い出しました。堀井さんの報告で、“そうだったのか”と思います。東京と神戸の紙面、内容の違いが。関西の大学の先生に、もっと東京に来て実態を都民に知らせる必要があると伝えたこともありました。（70代男性／東灘区）

■東・西での報道に対する温度差を初めて感じました。大変興味深かったです。
（20代女性／その他）

■新聞というひとつのテーマを現場・周辺・外部という切り口で比較しながら話が展開されたのが非常に興味深く、勉強になりました。山中先生のお言葉にあるとおり、人々の経験を史料として発信して欲しいなあと思いました。（20代男性／奈良県香芝市）

■ “震災報道現場”の生々しいお話、大変有意義でした。新聞だけでなく電波（テレビ・ラジオ）のお話もぜひ聞きたいと思います。（60代男性／大阪府）

■ 企画としては、良い企画だと思います。繰り返し続けて下さい。メディアには、間接的メディア（マスメディア）と直接的メディア（機関紙）があります。この特性と役割についても分析してほしい。（60代男性／垂水区）

■ 時宜にかなった企画、日頃知り得ない事項で有意義であった。（60代男性／西区）

■ 普通では知る事の出来ないニュースが数多くあり今後のボランティア活動に資する処大と感じた。（70代男性／灘区）

■ よかった。わかりやすかった。以前から気になっていた「関連死」のことも、改めてわかった。自然災害への“自衛の方法”の企画を希望します。（60代男性／東灘区）

■ 被災地内外の記者が、それぞれの立場から震災時の「役立たず」や「戻ってこい」とか違和感を今でも持っている。その違和感は何から来るのか、もっと知りたいと思った。（30代女性／東灘区）

■ 非常に興味深かった。未来のことかんがえれば、報道は現在進行形で史料をつくっているのだ。（10代男性／大阪府）

山形文化遺産防災ネットワークの活動紹介

手代木 美穂

平成20年1月25日、山形文化遺産防災ネットワークは同席者50名と共に活動を開始いたしました。山形県立博物館を会場に、県下の民俗・歴史・考古学を長きに渡り先導してこられた諸先生方から、地域の文化財を守り伝える活動を行っている若手担当者まで、それぞれが目指す防災ネットワークの形をお話し、設立を宣言できたことは大変有意義でした。思えば、その3年ほど前から活動準備は始まっており、2年前には県下の文化財を守ろうとする皆さんと活動の設立準備会を組織しました。その際には、先駆的な活動をされていた歴史資料ネットワークの奥村代表委員、松下事務局長からの御助言を度々いただき、山形にも勉強会講師として来ていただきました。わかっていたことではありましたが、災害が起きる前に日常的に災害時に備えるというのは、なかなか難しいものです。先生方のこれまでの活動とその精神を山形にて伝えてい

ただいたことが、どれほどの力となったか計り知れません。心より感謝申し上げる次第です。

さて、山形防災ネットは現在 20 名ほどの活動賛同者と共に、2 本の柱を立てて活動をすすめてきています。1 つは、文化遺産にまつわる災害活動に関する勉強会の開催、もう 1 つは地域にある文化遺産への地元の皆さんとの文化財マップづくりや地域文化財めぐり活動など、地域の文化遺産を地域の方々が意識できるような活動を進めていくことです。

特に、後者の活動は、活動賛同者がそれぞれの立場で無理なくできることを目指して行っています。ある者は所属する行政体でイベントとしてできることを、ある者は所属する美術館で日常的に行っている防災訓練を地域の保育園の皆さんにも見ていただく、ある者は「文化遺産を災害から守りましょう」ののぼりを作って各地に配布して、活動の広報を行う、などです。理想的には、もっと速く、もっと広範囲に同じことを、ということを考えがちですが、実は「こうしなくてはならない!」というやり方は災害がない内から活動を進める本ネットワークには向きません。できることから、一歩ずつ。片手間で、息長く続けることが何よりも重要と活動賛同者とは意思統一ができています。

本年度は 1 泊 2 日の意見交換会を行いました。1 日目は岩手・宮城内陸地震の被災地で活動を進めた県内の災害ボランティアからの活動報告や文化遺産防災ネットとの連携についてお話をしました。夜は懇親を深め、「このつながりが災害のときに役立つ!」と呪文のように唱えて、夜更けまで楽しい時間が過ぎていきました。2 日目は岩手・宮城内陸地震の際に山形防災ネットの初動についての意見交換や今後は被災文化遺産を移動するための場所を、メンバーの周囲で確認しておくこととなりました。

これからも、山形の地を這うように、じっくりとゆっくりとやり続けていきたいと考えています。

(てしろぎ・みほ／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター)

今年度の史料ネットは以下のメンバーで運営しています。当ネットの活動にご支援・ご協力のほどよろしくお願いします。

＜運営委員＞（五十音順）

- 大阪歴史科学協議会 石岡知久・川内淳史・佐賀朝・田中修平・山田藍
- 大阪歴史学会 森脇崇史
- 京都民科歴史部会 松下正和
- 神戸史学会 大国正美
- 神戸女子大学史学会 （欠員）
- 神戸大学史学研究会 奥村 弘
- 日本史研究会 板垣貴志

- 個人会員（2 名）中野賢治・河野未央

＜会計監査委員 2 名＞

- 木村修二・加藤宏文

＜事務局＞

- 代表 奥村 弘
- 副代表 藤田明良
- 事務局長 松下正和
- 副事務局長 中野賢治・板垣貴志
- 会計・NL 編集 人見佐知子

歴史資料ネットワーク編

『地域社会からみた「源平合戦」』

福原京と生田森・一の谷合戦』

(岩田書院ブックレット歴史考古学系 H-20、2007 年)



山田 落

■ 主要目次

- このブックレットができるまで／藤田明良
 生田森・一の谷合戦と地域社会／河合康
 内乱の諸段階と生田森・一の谷合戦
 生田森・一の谷合戦の「城郭」戦
 民衆の戦場への動員
 摂津武士の動員と摂津国惣追捕使多田行綱
 軍勢を先導する「案内者」
 嶋越と多田行綱
 南北朝内乱からみた西摂津・東播磨の平氏勢力圏／市沢哲
 南北朝内乱と西摂津・東播磨—山田荘とその近辺の地勢学—
 西摂津・東播磨の平家勢力圏—平家のテリトリーの縦軸と横軸—
 西摂津・東播磨の平家勢力圏の歴史的 성격
 生田森・一の谷合戦史跡地図／樋口健太郎

本書は、2005 年 9 月 25 日に神戸市で開催された「シンポジウム源平合戦—伝承された戦いの虚実」が母胎となってつくられたもので、シンポジウムで講演された川合康氏の「生田森・一の谷合戦と地域社会」と、当日のコメンテーターをされた市沢哲氏の「南北朝内乱からみた西摂津・東播磨の平氏勢力圏」という、二つの論文からなっている。

川合氏の論文では、生田森・一の谷合戦での鎌倉軍の勝利の一因は、多田行綱をはじめとする摂津武士、軍勢が戦場に向かう街道筋の民衆、現地の「案内者」といった地域の人々の協力の存在であり、それは「源平」合戦の展開そのものが、地域社会の利害関係と結びついた地域固有の歴史的主体の動向によって根底から規定されていたことを表す、と述べられている。市沢氏の論文では、

南北朝期の内乱の経過の考察から、平家による福原の拠点化によって、それ以前からあった福原を中心とした〈地域的なまとまり〉がはじめて〈政治的テリトリー〉として姿を現すようになったことが明らかにされている。

本書は、市民向けの講演を基調にしているということもあり、とても読みやすく、また内容も非常に面白いものであった。何より興味深かったのは、本書の特長でもあるが、史実と伝承との関わりも含めた地域と歴史とのつながりが次々と明らかにされていくところである。例えば、私の地元である阪神地域に勢力をもっていた人物として有名な多田行綱が、実はいわゆる「鴨越の逆落とし」を行った張本人であり、しかも行綱が鎌倉軍に協力していなかったならば歴史は変わっていたかもしれない、という事実を本書で知り、たいへん面白く感じるとともに、私は地元の英雄・行綱と交通の要衝として今でも重要な地元を少し誇らしく感じた。

さらに、本書の良い点として、私のような地域の人々の地元の歴史への興味をひき、現代の地域社会の在り方にも関心を寄せさせ、地元を誇りに思わせるようなものとなっている点もあげられるであろう。このことは、地域を考える上でも、歴史学そのものを考える上でも示唆的である。歴史学の本質のひとつに、歴史を知ること、今現在、そしてこれからの世界を考える手がかりとするというものがあるが、それは地域社会に関しても同じことがいえるのであり、これからの歴史学はもっと地域に根ざした方向性を探っていく必要があるのではないだろうか。

本書は、たまたま該当の地域の人であった読者の私に、地元の歴史と誇りを教えてくれた。これからも、本書のような地域と歴史の関わりを中心に据えたような本が増え、その地域の人々と出会うことを期待したい。

(やまだ・ふき／歴史資料ネットワーク運営委員)

☆ なお『歴史評論』706号(2009年2月)に高松百香氏の紹介も掲載されています。あわせてご覧下さい。(事務局)

史料ネット NEWS LETTER No.56 2009年1月30日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時～5時)

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/>

e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

史料ネットブログ開設しました！！

http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net